

二十六日は命令があり、日本人全員チチハルに出向せよとのことで支度し、ダーチャでは子供、老人を乗せ、私は後方よりついて行く。幾日かかったかは分からない、途中私らは事故なくチチハルの関東軍の倉庫に収容される。チチハルの町は邦人で一杯であった。

到着順に班に分けられ収容所に入った。ところが皆んなの顔も良く分からない。ひげも伸びてやせた人も沢山いた。二日後、「木下じゃないか」と言われ、良く見たら佐々木上等兵と杉本一等兵であった。一地区の戦闘の様子も佐々木さんより良く聞きました。杉本一等兵は某開拓団にいたとのこと。速射砲の今坂さんも病気でおられ、私と飯塚さん二人で出発まで介抱して、なにがなんでも故国の土をふむまでと力づけました。その彼は私より早く熊本の実家へ帰られた。

その後、お礼状が来まして、現在暮しているのも在満のおり、お世話になったためとのこと。私も中部第三部隊に入隊時、同年兵七名であったが、ほとんど一地区で戦死、笹山は開嶺戦で戦死され、現在私一人になりました。このため戦友会にも速射砲中隊の方

と一緒に出席させて戴いております。

チチハル出発は二十一年九月七日、新京、奉天、錦川、コロ島まで病氣、死亡者が多く出て、また汽車は引き込み線に入ったものの出るまで数日をついやすなどのこともありました。

コロ島出発は十月十九日、「撰津丸」九千六百トンで故国佐世保港へ向かいました。船内で病氣、死亡者があり、佐世保港外に停泊、十一月三日無事上陸しました。上陸後、援護局に申請し、六日品川駅行の車中の人となり我が家へ。

最後に北満で亡くなった開拓団員、戦友の方々のご冥福を祈ります。

## 私の初年兵時代

富山県 新田 政之

私が小学生のとき、日本が「満州事変」を起してから六十年。また酷寒の満州の兵営で、現役の初年兵で

辛苦していた最中、突然の非常呼集で営庭に整列し、隊長から日本軍が真珠湾を攻撃し「太平洋戦争」に突入したことを聞かされてから、ちょうど五十年目という十二月八日が、まためぐってきた。

私は、少・青年時代から日頃健康ではあったが、体格的には軽量のフライ級でした。このため戦前、国民の三大義務の一つであった二十歳の徴兵検査を控え、かつて日露戦争に参戦した父（故人）が、私の体軀からして「甲種合格は絶対にありえず、兵隊に行くことはないだろう。」と言ひ、家族一同もその気になっていた。

また、勤務先の会社の上司や、先輩同僚も毎日私の身体を眺めて、私の父と同様に「軍隊に入るような体格ではない」と、よくいわれてきました。周囲のこうした声を耳にし、私自身もその気になって兵役は免れるものと信じ、徴兵検査の当日は、軽い気持ちで町の検査場に足を運んだ。

徴兵検査場ではかなり緊張したが、精密な検査の結果、父の予想どおり甲種合格にはならず第一乙種とな

った。家へ帰り「甲種でなくてよかった。これで兵隊に行かなくてすんだ」と家中で喜びあいました。しかし、この「第一乙種」には裏がありました。

その頃、日本が日支事変の深入りから戦線が拡大し、戦力低下が大きく戦況に影響を及ぼしていることから、軍部が兵力の増強を行うため、徴兵検査で従来の「甲乙丙丁」の四区分で甲種者のみ現役兵として徴集していたのを改正し、第一乙、第二乙種に区分して第一乙種も現役兵として徴集することを決めたのです。

そのため第一乙種の私に、本人の思惑に関係なく現役兵徴集の通知があつて、翌年二月、予想もしなかつた金沢市の山砲兵第九連隊に入隊しよう通報があり驚きました。私は兵種の持つ意味の深さは知らなかつたが、軍隊経歴を有する父は非力な私が山砲隊入営の羽目になったことでショックを受け、私の前途を危惧してか、涙を流していたことが今でも思い浮びます。

昭和十六年二月、金沢山砲隊に入隊した初年兵は、満州の牡丹江省へ派遣されるのが予定されておりました。私の周囲の同年兵はみんな体が大きく、一週間兵

營で寝起きするだけだったが、それぞれ明日からの兵務のことを懸念してか、対話はずまず、沈黙の時間が長かった。

こうして兵力増強の過渡期に徴兵された私の初年兵時代は、実に懐愴でした。

### 一、体力的な劣り

分解した砲身（代用）が両腕で持上がらず罰として昼食が抜かされることしばしばあり。

### 二、大和魂の欠除

やればやるほど、疲れて砲身上げは駄目、「大和魂が入っていない。」と、どなられ。「魂だけなら誰にも負けません」と、いったら目から火玉が出るほど、撲られた。

### 三、馬きらい

生来、馬嫌いの身が厩舎にひしめく軍馬手入れに、身心ちじみこむ。

入営早々、古兵が私の身体を見て「キ様、衛門を間違えたか？」というほど私以外の同年兵はみんな大きかった。内務班の両隣の同年兵は拓大・柔道部主将だ

ったK、出羽海部屋の幕下Sと、見るからに逞しい猛者達でした。

従って同年兵の大半は非の打ちどころがなく、その分よけい私がハンダーを背負ったものです。連日、このような苦難から私が寝台の毛布の中で、種々模索したのは、このままでは軍隊で殺される、と思いい、一期の検閲まで死ぬような思いで辛抱し耐えました。

やがて一期の検閲後、体力的な理由で本科を断わり、分業の有線通信を選択した。これが私の肌にあったのか、中隊のAクラスの成績となり、後日初年兵ながら野外演習の指揮班の乗馬通信手として、電話機を背に軍馬を鞭打ち、目的地へ奔走したものです。

だが泊りがけの演習の野営地で古兵に呼ばれ「二・三年兵の神様、仏様（古兵のこと）が徒歩で馬を挽いているのに、下新兵のキ様が馬上で居眠りをしていた」と、気合を入れられ、口元が裂け血がほとばしるほど叩かれた。これは初年兵の私が馬に乗っていることに對する「いやがらせ」の最たるリンチだったと思う。

こうして、何かというと「天皇に代って……」を口実

に、苛責なき私的リンチを加えられた私達初年兵も、一期の検閲を終え、七ヵ月後私は軍の新編成で奉天省に転属になり、そこで二年半軍役に服し、ひたすら前年まであった満期除隊を指折り数え、切望していた。

ある早朝、突然の非常呼集ラッパで整列したら隊長から軍動員の下達があり、人事担当准尉から氏名が呼ばれ、それぞれ右・左に分別された。右側が主力で、左側は初年兵と召集補充兵・病弱兵、それに初年兵と補充兵の教育担当助教だった。私は補充兵の助教で左側に並んだが、隊長の言葉に愕然とした。右側の主力部隊は内地へ移動、左側の残留部隊は牡丹江省の原隊復帰でした。

その晩、主力部隊に入った同年兵の戦友達は、内務班で「これで満期だ」と、喚くように喜び、酒を酌み交わすのを眺め、原隊復帰の私は好きな酒も咽を通らず、わが身の不運を嘆き、毛布をかぶり涙していた。

ところが、この主力部隊の内地移動は偽りで、輸送船は日本本土を素通りし、硫黄島へ上陸、やがて米軍の総攻撃で、軍司令官以下全將兵が玉碎したことを、

沖縄から台湾に移動した軍営地で知らされ絶句する。結び。古兵が口癖みたいに「帝国陸軍の精兵を育成するため」といって、非力な初年兵の私に加えられたピンタの数々が、今だに臉にうかぶことがある。

## 終戦時の関東軍第一三四師団挺進 隊の最後

鳥取原 白髪 昇

終戦時二十二歳であった私も、既に六十歳の半ばを過ぎてしまった。しかしこの間、当時の事を一刻も忘れる事は出来なかつた。肇国以来、かつて無い敗戦の事実、それは言語に絶する苦悩に満ちたものであった。戦争を知らぬ世代が、国民の過半数を占める今日、戦争体験について記すことに、どのような意味があるのか、人それぞれに、異論があるかも知れない。しかし、一小隊長として戦争に参加し、特殊な経験をした一人として、当時の状況を記すと共に、今は亡き戦友の偉